

『愛にかわる、キスの永遠』

著：小塚佳哉

ill：沖麻実也

「おい、リ्यूージュ」

「……なんだ？」

「いいから、ついてこいよ」

そう言われて、龍樹は脚立を抱えた賢一の後を追いかけた。

半地下になっている書庫の一番奥、もともと置かれていた物置のような一角に脚立を戻すと、賢一は龍樹を振り返った。

「明日の土曜日、学校で父母会があるから、お袋は親父のところに行かないって」

「そうか」

そっけなく告げられ、龍樹も頷いた。

叔母が出かけないということは、この週末は泊まりに行かなくてもいいということだ。

考えてみれば先週末から気まずいまま、賢一と二人きりにならないですむのは、ちょうどよかったとも言える。けれど、そう思いながら、心のどこかで気落ちしている自分に、龍樹は気がついた。ホッとしているくせに落胆しているような、そんな複雑な気持ちを自嘲すると、龍樹は自分に言い聞かせるように呟いた。

「それだったら、今度の週末は泊まりに行かなくていいんだな」

「……どうして？」

鋭い声に問い返され、龍樹は訝しげに賢一を見た。

「どうして来ないとか言うんだよ？」

「でも、おばさんがいるなら、オレが泊まりに行く必要は……」

「カンケーねーよ」

「……賢？」

賢一の苛立っている理由が、龍樹にはわからなかった。

よっぽど訝しげな表情をしていたらしく、賢一は舌打ちをすると、龍樹を睨みつけたまま、責めるように吐き捨てる。

「なんだよ、嘘だったのかよ……追試が終わったら、やらせるって言ったくせに」

「——……………」

その言葉に、龍樹は絶句してしまった。

あらためて賢一の関心は、それしかないのだと思い知らされる。

もちろん、身体だけの関係でかまわないと思っていた。ずっと思い込もうとしていた。

けれど本当の気持ちは、他には何も望まないと自分自身に言い聞かせながら、誰にも賢一を渡したくないと思っていただけだ。

同年代の女の子が道場に集まってくると聞いただけで落ちつかない気分になったり、母親が賢一を誉めるだけでも不愉快になった。

嫉妬や独占欲といった自分の醜い感情に気づくだけで、たまらなく苦しくなった。

だから、賢一が欲しがってくれるなら身体だけでもかまわないと、自分の本当の気持ちさえ偽(いつわ)ってきたのだ。

(……そのつけが回ってきたということか)

言い返す言葉も思い浮かばず、龍樹は口唇を噛みしめた。

どんな暴言を投げつけられようと、賢一を責める気にはなれなかった。

本(もと)を正せば、これもすべて自分自身が招いたことだ。

けれど黙り込んだことで、賢一は焦れたように龍樹の肩をつかんで、書架に押しつけながら詰め寄ってくる。

その瞬間、きつい香水の匂いが鼻についた。さっきの女子大生の移り香だった。

こんな移り香が残るほど、彼女は賢一に近づいたのだろうか？

いや、声をかけられた龍樹を押し退けて、賢一が自分から手伝いに行ったほどだ。賢一から近づいたのかもしれない。でなければ、こんなにも強く匂いが残っているはずもない。だが、そう思っただけで醜い嫉妬が胸の中で逆(さか)巻(ま)く。

お門(かど)違(ちが)いの嫉妬など醜いだけでなく、たとえようもなく愚(おろ)かだ。

自己嫌悪を感じた龍樹は思わず、賢一から顔を背けて詰め寄ってきた身体を押し返した。

「……なんだよ、リュージュ」

「いいから、離せ」

「なんで？」

訝しげに問い返す賢一は、あらためて龍樹を引き寄せる。

それでも抗えば、龍樹の抵抗に煽られたように賢一は腹立たしげに手首をつかみ、無理矢理、押さえつけようとする。

「……離せ！」

「やだね」

「賢」

咎(とが)めるように名前を呼んでも無駄だった。龍樹が身をよじって逃げ出そうとしているのに、賢一は力まかせに書架に押しつけて顔を近づけてくる。

気づいた時には口唇が重なっていた。

噛みつくようなキスだった。

顎をわしづかみにされ、龍樹は顔を背けることもできない。両方の手首もまとめてつかまれ、賢一の身体を押し返すこともできなかった。しかも閉じていた口唇を強引にこじ開け、賢一はためらいもなく舌を滑り込ませてくる。

「ん……っ」

熱い舌先を感じた途端、龍樹は目眩がした。

誰が来るかもわからないような場所でキスをしていることに。

けれど、満足に息もできないまま、上顎の内側や喉の奥まで舐められ、淫らなキスのせいで意識が遠くなって、自分がどこにいるのかもわからなくなってくる。

「……んんっ、はあっ、ん」

それでも、つい漏らしてしまった自分の声に、龍樹はあわてて我に返った。

「賢っ……よせっ、こんなところで」

「うるせーな」

「ん、んんっ……賢っ」

龍樹が喘ぐように訴えても、賢一はキスをやめようとしなない。

しかも書架に押しつけるように身体を寄せたまま、賢一は龍樹の足の間に膝を割り

込ませて、翺るように股間を押しつけてくる。

これ見よがしに敏感なところを刺激され、龍樹は大きく息を呑んだ。

「……んんっ」

「やっぱ、反応いいな、リ्यूージュ」

「よ、よせって」

「やらしーな、よせって言いながら固くしてんじゃねーよ」

「……くっ」

「リ्यूージュみたいのを淫乱ってゆーんだぜ」

本文 p140～146 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>